
月光

鈴鳴月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光

【ZINE】

Z7905Z

【作者名】

鈴鳴月

【あらすじ】

「それはわしのじゃ。返せ」

「え、でもこれ賞味期限切れてるわよ」

それが私たちの最初の会話だった。

「私」は、夜の学校に無断侵入をする。そんな私の目的とはいきなり私の目の前に現れた自称「学校の守り神」。

そんな少し壊れたふたりが織りなす、小さな話。

残酷な表現を含みます。ホラーなのかファンタジーなのか幻想なのか分からぬ短すぎる話。食事中にはお勧め出来ません！

(前書き)

短編です

他の作品とは何の関係もありませんので勿論伏線でもありません
続ける気もありません

ちょっとした休憩（食事中除く）にじりついで

残酷な表現を含みます

「それはわしのじや。返せ」

「え、でもこれ賞味期限切れてるわよ」

それが私たちの最初の会話だった。

冬なのに基平の上にフードつきパーカーを着て、狐の面を被った変な子供と、夜の学校に現在進行形で無断侵入中の私の。

わし、と自分のことを変な一人称で呼ぶその子供は、自分はこの学校の守り神であると名乗った。

「え、守り神がゼリー欲しいの？」

「守り神であろうとなかろうと欲しいものは欲しいのじや」

ふん、と鼻息を荒くしながら、それでも守り神は私が渡してあげたゼリーをおいしそうに頬張っていた。賞味期限切れだけど

「して、お前は何故このような時間にここにあるのじや？」

口に学校給食で良く見る紙のスプーンを挟んだまま、守り神は私に尋ねた。

「何でだと思つ？」

「質問に質問で返すない」

「飛び降りるつもりだったの。屋上から」

「何じやと？」

守り神の、驚いた顔。

「だつてさ、こんな月夜なんだよ？ 飛び降りるときに月を見て死ねるなんて最高じやない」

「何故飛び降りたいと思ったのじゃ？」

「何でつて……当たり前じゃない。月が見えたからよ」

「お前は生糀の変人じゃのつ」

ため息をつきながら守り神は私のほうを振り返つた。

狐の面のせいで顔は分からぬけれど、守り神はなんとなく寂しそうだ。

「お前は良い。死ぬのに理由などいらんからな。わしにせぬ羨ましくてならん」

「誰が死ぬの？」

「誰が……つて、お前がじや。お前がつて言つたではないか。月を

見て死ぬと

「誰も自分が死ぬなんて言つてなこじやない。私はただ飛び降りるだけ。月を見て死ぬのは理想だけだ」

「うぬ？……つむ」

私の言つた言葉が未消化なのだつ。脇^ふに落ちないと言つよつて

守り神はしきりに首を捻つていた。

「でも私、屋上から飛び降りたぐらいでは死なないわよ？」

「ふぬん？」

驚いたように私のほうを見る守り神。そんなに驚く事かな、と思

いながら、私は小さく種明かしをする。

「だつて私、飛び降りる地点にたくさんマット敷いてきたもの」

「なーんじや

守り神は落胆したようにため息をついた。そして私の手に空になつたゼリーの容器を手渡してくる。

「だめよ。自分で食べたのだから自分で片付けなさい」

「この学校の中にあるものは全てがわしの物だとは言え、持ち込んできたのはお前ではないか」

「いいえ、違うわ。それはもともと学校の宿直室にあつたもの」

「……ぐぬう」

少し拗ねたように、守り神はゼリーの器を自分の服パークーのポケットに入れた。仮にも神様だから、『ゴミぐら』に燃やすか何かをして片付ければいいのに。

「じゃあ、私は屋上に行くから。守り神も来る？」

ぺたんぺたんと守り神の草履の音をしばらく聞きながら、その心地よい音に耳を和ませながら、それでもそろそろ時が来たと思って私は守り神にそう言つた。

もうすぐ、月が天辺に来る。

「無論じやい。このような面白げなもの、見逃せるか。あとわしことを守り神と呼ぶな。良いか、わしの名はヒサモリじや」

何が面白いのか、守り神 ヒサモリはくすくす笑いながら私に釘を刺した。

「わかった。じゃあヒサモリ、行こつか

「うむ」

そして私はヒサモリと並んで歩き出した。

「硫酸頭からかぶつて皮膚が爛ただれて苦しい中、悲痛な叫びをあげて死んじやえつ！ もう私知らない！」

「ま……待つてくれユミー！ これは違うんだー！」

そんな声が聞こえたのは一人並んでゆつくりと、屋上の一歩手前である三階まで来た時だった。

「まだどこかのかつぶるが密会をした拳句破綻しよるのう」

ヒサモリはその声とその声に混じる破壊音、何かが焼け爛れる音やその後の断末魔の悲鳴を耳にしても平然と言い放つた。慣れているのだろうか。

まあ学校という場所の特性として人が（心身問わず）傷つくことはままあるから、……ひょっとしたら私たち生徒には知らされてい

ないだけで、こんな事も日常茶飯事なのかも知れない。

「そうね。大抵のカツプルは自業自得的に関係を破綻させるわ」
勿論私も気にしない。そんなことをいちいち気にしていたり限り

ある人生きりがないから。

「あら。 理科室のほうね」

どうやらその騒動が起った所は硫酸と言つ单語や音の方向からして理科室のようだ。

「そうじやな」

「私たちばかりじてもその前を通らないといけないのかしら」

「それ以外に道はないぞい」

「……そうね」

ヒサモリが言つた通り、科室の前を通らないと屋上には行けない。

「まあいいでしょ。 焼け爛れた死体一つ見るべからず、ビリビリとはないわ」

「その通りじや」

私たちのはんびりと歩いていく」と云つした。

「あのねヒサモリ」

「何じや？」

「廊下に死体が二つ転がっている場合、ビリすすればいいのかしら」

「そのまま踏み越えるがよかる」

実際ヒサモリはまだしゅうしゅうと熱ではない煙を上げているその死体を踏み越えている。

裸足に草履で硫酸の上を歩くのは危険だと思うのだけれども、ヒサモリは仮にも守り神だけあって足びりの草履にも焦げ跡一つない。

「実に的確か且つ倫理觀から限りなく遠い答えだわ」

私はため息をつきながらそう言つた。

「神にヒトと同じ倫理を期待するない」

「まあ、その通りね」

ヒサモリに言われたとおり、私は死体を踏み越えた。

しゅうしゅうと変な音を立てて上履きのゴム部分が溶けるが、気

にしない。

しかし片方の白衣を着た先生らしき死体はともかく、片方はまだ卒業も経験していないような幼女だ。

「ふふ、変態の変死体ね」

「言つてやるない、そいつも最後は愛する者と一緒に逝けて幸せか
う」

「それもそうね。バイバイ、変死態さん」

双方とも、生前の行いはともかく醜い死に顔は変わらない。

濃硫酸を置いている学校もめつきり少なくなった中で、この学校は規格外らしい。傍らに転がるガラスの瓶は、三つ。

浴びた硫酸が希だつたほうが良かつたのか、濃の方が良かつたのかは個人個人の判断によるだろうが、少なくともこの学校がもう終わりだと言う事だけは分かる。

「お前、漢字が交じつてあるぞ」

「いいじやない別に。的確でしょ？」

「まあそうじやが」

私はついに屋上にたどり着いた。そして、金属で出来た人を支えるにはあまりにもお粗末な柵を乗り越える。

「じゃあね、ヒサモリ。また機会があれば」

私は眼下に積み重ねられたマットがあるのを確認する。

マットがあつても痛いだろう。下手をすると骨を折るかも知れないし、もしかしたら本当に死んでしまうかも知れない。

まあ、それも理想だろ？

「ああ、さよならじや」

ヒサモリが私を送り出す。たぶん、笑顔で。
私はそれに笑い返すと、持っていた柵を手放した。

ヒュウ

鋭い風切音。

私の身体は、綺麗な月の光を浴びて落_下していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7905z/>

月光

2011年12月25日14時52分発行